宋代中国科挙社会の研究　論文概要書

近藤一成

序論は、本書が唐末から五代、宋にかけて大きく変容した中国社会を、士‐庶という中国史に一貫する支配‐被支配観念を手がかりに考察し、二〇世紀初頭の辛亥革命まで続いた伝統王朝約一千年間の体制再生産構造の解明に寄与することが最終の目標であることを提示する。しかしこの大きな課題に答えることは、この本書のみでは当然不可能である。それ故、王朝の体制再生産の鍵としての科挙に着目し、宋代における科挙社会・科挙文化の形成と展開のごく一部を明らかにすること、これが本書の当面の目的となる。

唐代までは固定的実態的区分の傾向が強かった士‐庶の別は、その弁別の規準が科挙におかれることによりその内実を流動化させた。士‐庶（＝農・工・商）の別が固定身分制ではなく一種の職能制の形をとり、科挙に合格するのみならず受験あるいは受験能力が認められるなど、科挙に係わることが士の階層に属する条件となり、士大夫と庶民の間に士人という大量の中間層が出現した。経済的・社会的安定を獲得する殆ど唯一の道が科挙合格であり、科挙合格のためには経済的・社会的安定を備えねばならないという相反する条件が併存する上昇・下降の厳しい競争社会は、社会構造の変革に向かうエネルギーを社会の流動化へと誘導した。

また見方を変えれば科挙は毎回膨大な落第者を生み出す制度である。大多数の応試者は最終のゴールに達することなく一生を終えた。そのかれらが、体制に不満を抱き反乱を起こすという事態は確かに史上存在するが、それらは例外であり大多数の落第者のさらに大多数は、どのように不満を抱こうが結果的に自らの選択に納得せざるを得なかったのである。とすれば、科挙社会は落第者を納得させる仕組みまで備えていたとみるべきであろう。こうして科挙は清朝に至るまで王朝の交替を超えて伝統社会体制を再生産する機能を果たし続けた。このように伝統社会体制の再生産システムに科挙が組み込まれていることを、科挙社会と呼ぶことにする。

本書は、筆者が過去に著した論考から関係論文を抽出し、Ⅲ部に分け改めて科挙社会の形成と展開を考察するものである。以下、各部各章について概要を記す。

Ⅰ部国制篇は、宋代固有の科挙制度確立についての諸問題を考察する。唐末五代の武人支配体制から生まれた宋朝が、唐に比べれば大幅に版図を狭めながらも六代とはならず再び統一王朝として継続支配に踏み出し得た理由は、第一に文治体制への移行が大きな摩擦なく行われたことにあろう。その文治体制に不可欠な文官を、原則として門地ではなく個人の能力を基準に選抜する科挙によって全国から登用したことが、王朝の求心力を維持し得た要因と考える。また中国近世の科挙は学校制度と密接に結びつき、それ故、とくに中央・地方の公立学校は科挙の補完物であり続け、本来の教育機能を果たす機会はほとんどなかった。これは宋代科挙制度の確立過程が、官僚の選抜すなわち科挙と、官僚の養成す

なわち学校を統合した制度、当時の言葉でいえば取士の権と養士の権の一致を目指す動きであったことと、しかし当初の意に反したその結果に由来する。本書は、科挙社会形成の要因としてこの科挙・学校制の問題を重視する。

第一章「宋初の国子監・太学について」は、漢以来設立されていた太学が内実を変えて宋の仁宗朝国子監に出現する経過を追い、その背景として既に国子ではなく庶人からの学生選抜が主流となっていたことを指摘、加えて解額という府・州・軍ごとに割り当てられる宋代固有の一次試験合格者枠が唐の学校進士制を継承して太学にも与えられたこと、科挙の最終合格に有利な都での受験を目指す受験者の激増などから進士の地域差が無視できぬ程に高じて議論が起こっていたことにも触れた。第二代皇帝太宗のもとで文治政治に大きく舵が切られた後、科挙合格者数は劇的に増加し、地方も科挙に敏感に反応して応試者が殺到したにもかかわらず、中央に送られてくる郷貢進士のなかには学力低劣と評価される者が多く政府を悩ませることになった。こうして官僚登用制度における養士と取士の一致が課題となるとともに、糊名・謄録法など科挙をいかに公平で不正を許さない制度とするかの改革が実行される。不正の防止には限界があったものの技術的改革が一段落すると、次には官僚にふさわしい人材を抜擢するにはどのような試験科目がよいのかを中心とした、科挙制度の根本にかかわる議論が展開する。

第二章「「慶暦の治」小考」は、こうした科挙・学校制度の改革に連動して宋代の政治と文化の主要な担い手である士大夫が歴史上に顕現する慶暦年間を対象に、その士大夫政治とかれらの政治改革を検討した。官僚にふさわしいとは、この士大夫像の問題である。またその改革政治の挫折の原因、あるいは改革推進者たちのうち欧陽脩を始め、後の王安石新法時代に存命だった士大夫の多くは安石新法が慶暦新政の課題を継承する要素があったにもかかわらず反新法側に立った理由についても検討し、士大夫政治の特色について述べた。第三章「王安石の科挙改革をめぐって」は、その著名な改革を再考することで、宋代科挙の特質を中国史上に定位させようとする試みである。帖経・墨義という暗記試験、詩賦という文芸の試験では官僚にふさわしい人材は得られないとして経義中心へ移行したその改革は、単なる試験科目の変更にとどまらず、宋学の展開や士大夫政治の究極の規範である経書解釈の統一問題に繋がり、さらに一見、改革論議では共通性の多い安石と司馬光が、実はそれぞれ対照的な王朝国家像を思い描き、それへの道程として科挙を位置づけていたことを検討した。新法の失敗後、旧法党政権の下でも科挙は改革以前に戻ることなく、かといって安石が目指した学校における官僚の養成という最終目標に向けての歩みもなされないまま、実質的に北宋最後の時代となる徽宗朝を迎えた。

第四章「蔡京の科挙・学校政策」は、本書の中心となる論考である。北宋を滅亡させた張本人として、また徽宗に取り入り、宰相として自己保全のみの立ち振る舞いが目につく蔡京。史上すこぶる評判の悪い蔡京こそ、安石の科挙・学校構想を形の上で実現した人物である。その結果、かれの政策は中国近世科挙社会形成に決定的な影響を与えた。蔡京は、安石の科挙改革が最初に現われた熙寧三年の殿試に合格し、時の権力者に迎合しながら順

調に位階を上げてゆく。その蔡京は、入仕の始めから学校政策にかかわり、官界で最も学校制度に明るい人物として活動した。宰相になると直ちに学校からの出官の道を拡大し、やがて科挙を廃止して官僚は原則太学卒業生をもって充てる「天下三舎法」を実施する。しかし郷試・省試・殿試の三回の試験とはいえ一度の機会で釈褐できる科挙に比べ、県学・州学・辟雍・太学を順に進む学校経由は任官までに膨大な時間と努力が必要とされ、移行期の措置として残された科挙に人々は集まり学校は不人気を託った。結局、蔡京は、地方学の学生に官戸に準ずる免役などの特権を授与するという利益誘導によって人々を学校に向かわせようと図った。効果は覿面に現われ、全国の学生数は激増し、推測では最終的に全国で三十万人以上を数えるに至った。しかし、このことが同時に「天下三舎法」の継続実施を困難にする。原則すべての県・州に学校を建て学生を収容し教授を置くことが財政上無理であることに加え、地方学生に免役特権を与えたことは、編戸の役を前提に成り立つ地方行政を破綻させる。こうして養士と取士の一致という学校経由の官僚登用制は僅か十数年で頓挫した。ところで、南宋の「清明集」の判語にしばしば庶と区別され刑罰面でも学生になぞらえて優遇される「士」への言及がある。かれらこそ、蔡京「天下三舎法」下に出現した地方学生の系譜上にある、多くは官位を目指すよりは在地勢力としての地位確保を第一義とする地域有力者層であり、近年の論議でいえばローカル・アクティビズムの主役である地域エリート層の母体といえよう。すなわち科挙へのかかわりあいを基準とする士‐庶の区別が地方に浸透する契機は、蔡京の科挙・学校政策にあったと結論する。

第五章「南宋初期の王安石評価について」は、高宗朝の道学系官僚たちの動向と、秦檜による弾圧及び党争を概観し、一般的には、北宋滅亡の原因を新法党による政治に求めた南宋は旧法党系価値観の時代とする見方に対し、少なくとも高宗朝は、徽宗朝下で王安石の学問を学んだ実務派官僚の存在を無視できず、旧法党系の道学が公認されるのは一二四〇年以降であることを検討した。Ⅰ部最後の第六章「紹興十八年同年小録三題」は、朱熹登第の登科録である同年小録から、この科挙にまつわる、最下位除履の合格顛末、紹興陸氏の受験戦略、朱熹の本貫問題について論じ、科挙の実態について瞥見した。

Ⅱ部地域篇は、科挙社会の主役である士人層と地域社会について考察する。まず第一章「南宋地域社会の科挙と儒学―明州慶元府の場合」では、史料条件に比較的恵まれている明州慶元府を例に課題設定を行う。宋代科挙の地域別進士合格者数の差は既に多くの先行研究で指摘され、その理由についても議論されてきたが、本論文では地域の合格者総数の比較ではなく、地域の進士合格者数の時期による増減を問題にする。解額制により一次試験の合格者数は州ごとに決められていたが、省試には地域割り当てがないため地域の最終合格者数は毎回の科挙で異なる。これを前提に南宋の東南沿海十州軍をみると、おおまかではあるがそれらは三つの類型に分けることができる。すなわち高宗朝から度宗朝までを漸増型、漸減型と一定の数を維持する三種である。明州慶元は理宗朝にピークがくる漸増型の典型であり、そうした傾向を生みだす原因を士人社会の形成と展開という視点からと

らえるとどのような理解が可能かについて検討した。具体的には南宋末に活躍した学者官僚の王応麟と黄震の、登第までの家庭状況、合格時の年齢や順位、登第後の官歴などすべてが対照的な二人を比較検討することで、東アジア海域世界の発展と連動しつつ、唐末五代、北宋滅亡と華北の戦乱を逃れ多くの移住者が流れ込んだ新興開発地域としての明州およびその士人社会の形成過程について一つの見通しをつけた。第二章「鄞県知事王安石と明州士人社会」は、明州士人社会形成の起点とされる北宋慶暦年間を検討の対象にする。従来の研究が後代の史料を無批判に利用して明州士人社会の盛況を叙述することの問題点を指摘し、同時代史料としての王安石の記述をもとに史料批判を行った結果、明州「慶暦五先生」像は、南宋後半期に確立・盛時を迎えた明州士人社会が、自らの来歴の物語を必要として紡ぎだした歴史像であり、王応麟によるその定型化と元朝に入り応麟の弟子である袁桷の著作によって歴史像が定着し継承される経緯を明らかにした。こうした地域士人社会が作り出す地域の歴史像は単なる虚構ではなく、そこには現在とは位相を異にするが同様の歴史認識と歴史事実の関係の問題が横たわっていることを確認した。また安石、舒亶など地域にかかわった人物像についても、中央政府で編纂された史書と地方志の記述の差異が認められ、そこにも単純な中央・地方の二項対立の枠を超えた関係が読み取れる。第三章「宋末元初湖州呉興の士人社会」は、進士数の推移が明州と対蹠的な漸減型を示す湖州を例に、漸減の原因について考察する。具体的には湖州出身で南宋の禄を食み、元朝成立後は出仕と不仕という反対の立場にありながら交流を続けた趙孟頫と周密の二人の関係を、孟頫が密のために描いた「鵲華秋色図」を手掛かりに検討する。新興開発地明州と違い、古くから山水景勝の地として知られた湖州には、多くの名族・士大夫が居住・寓居し、琴棋書画など伝統文化に親しむことに人生の楽しみを見出していた。かれらにとっても官位は必要であったが、それらは長年の挙業に身をすり減らして獲得するもの、それとて不確なわけで、より確実で安易な恩蔭での出仕を願った。こうした士人社会の熟した雰囲気が、合格者漸減の背景にあると推測した。ただしこうした見方を支えるには、更なる比較可能な事例研究と、異なった視点からの多角的な検証が必要とされることも同時に述べる。

以上の明州慶元の考察に対し、以下は個別の問題を扱う。第四章「王安石撰墓誌を読む―地域、人脈、党争―」は、安石『臨川集』所載墓誌墓表実数一一二件の検討である。その内訳は、男性が八十二名、うち有官者は進士登第三十九名、諸科、恩蔭、武官などが二十五名の計六十四名、無官の者十二名とほかに宗室六名である。女性は三十名で、有官者夫人が二十二名、有官者母三名、宗室夫人三名とその大部分を官僚の妻が占める。近年の中国史研究は出土墓誌を積極的に利用するが、それは膨大な新出墓誌の蓄積が進んだ唐以前が中心で、宋・元代は多くの墓誌銘が個人文集に収録されて石刻史料という認識が薄い。明清時代に至っては宗族や個人伝記資料として族譜などほかにも豊富な文献が存在するという史料状況があり墓誌の利用は限定的である。本章は、宋代における石刻史料学の確立を視野に入れつつ、安石撰墓誌から窺える北宋士人の地域帰属意識、人間関係と党派意識

について初歩的考察を行った。地域、人間関係のいずれの形成にも科挙登第が重要な契機となっており、科挙社会は安石撰墓誌を規定する大きな枠であることを確認した。本来は墓の中に埋められ遠い後世に故人の功績を伝えるべき墓誌銘が、当時の士大夫の作品として広く同時代の人々に読まれる事態の出現に宋代士人社会の一面をみることができる。

第五章「南宋四川の類省試からみた地域の問題」は、類省試という南宋初期に行われた臨時の措置が四川のみ継続し、中央からたびたび弊害を指摘されるような、科挙をめぐる特異な環境を出現させたことを論じ、科挙社会の地域性を考察した。またそのなかで進士数の問題に触れ、四川地方志に残された合格者名と四川出身の魏了翁『鶴山先生大全文集』収載墓誌銘の四川進士合格者名とでは大きな差異があり、類省試のみで進士となった人物の扱いを含め、『地方志』選挙の項から復元する合格者数の正確度について、少なくとも四川は大いに問題があることを述べた。地域性は士人社会の問題にとどまらず南宋の国家形態にまで関係してくる。

第六章「宋代の士大夫と社会—黄榦における礼の世界と判語の世界—」は、士人の事例研究として朱熹高弟で女婿である黄榦を取り上げ、その生涯を追いながら、朱子学の社会的地位の確立、士大夫における理念と現実の問題などを論じた。中国史上の伝統概念である士は、唐宋変革期を経て新興士大夫官僚として新しい政治体制の中にその政治的位置を確定し、科挙は士大夫官僚を再生産する装置としてそれなりに機能した。また士は、北宋半ばに顕現した新思潮の担い手として、新しい世界観の形成に参画する立場も確保した。しかし、それらに比べ社会の中、特に地域社会内部でその政治的、思想的に見合う安定した、より正確にはそれらと整合する位置を士大夫・士人層は未だ確立してはいなかったようにみえる。士人が地域有力者として形勢戸と規定されたり豪横の呼称を冠せられる事態の出現が、それを物語る。士人の現実社会での存在形態が、政治上、思想上のそれと齟齬をきたしていたと言える。それぞれの個別の事情を抱えた士人は、個人として或いは親族集団、地域内存在、学派、官僚集団としてそれぞれのベクトルをもち、それらの総合として時代のベクトルが形成される。黄榦の提示したあるべき士人の姿は時代の総合ベクトルとどう関係し、結果的に後世の歴史にどのような影響を及ぼしたのか、またそれら士人に焦点を絞った南宋中期の地域社会の断面の構造を、北宋社会のそれと比較することによって、その構造が北宋以来の延長線上に在る同質のものなのか、或いは連続線上にあるが北宋社会の成熟形態としての変化がみとめられるのか、それともこの時期に初めて出現する何らかの新しい要素を抱えた社会なのか、時代の歴史的特質を確定する作業が今後の課題であるとの結論は、宋代科挙社会研究が未だ道半ばであることの表明である。

第Ⅲ部個人篇は、蘇軾についての諸問題を取り扱う。唐宋八家の筆頭格に数えられ、宋を代表する詩人でもある蘇東坡は、典型的文人として現在に至るまで中国の人々に根強い人気を保つが、かれの正式な肩書きは翰林学士承旨、礼部尚書まで務めた士大夫官僚である。その官僚としての経歴は、恐らく本人の望まなかったことであろうが新旧両法の党派

争いの渦中にあって一方の旗頭と目され、政治の荒波に翻弄され続けて生涯二度の配流を体験している。科挙社会の最上層に属す蘇軾は多方面での才能を発揮し、かれについての研究は士大夫社会、士大夫文化全般に繋がるが、本論文では科挙登第から始まる文人官僚蘇東坡を中心にした研究である。

第一章「東坡応挙考」は、成都眉州を本貫とする蘇軾が、一次試験の解試をどこで受けたかを、『蘇文忠公詩編注集成総案』の記事を手がかりに考察し、本貫取解の原則に反して開封府の寄応取解であったことを論証し、その背景を探った。当時の科挙規定からは明らかに違法行為である。しかし官僚の登用は他薦が原則であり、自らが応募する科挙は必ずしも最善の官僚登用法ではないという伝統的認識は依然強く、能力主義が原則である科挙を高く評価する現代人の感覚では測り切れない側面を科挙制度が有していることに注意しなくてはならない。人間関係、いわば「情実」が果たす役割を蘇軾の場合で考えれば、中央政府高官として成都府知事に赴任した張方平の存在が浮かび上がる。若い蘇軾・轍兄弟の応試を主導したのは、自ら猟官運動に奔走した父の洵であり、登第後の制科応募に至るまで、四川の一地方の一有力家族を天下の名族に押し上げるに力があった。第二章「張方平「文安先生墓表」と弁姦論」は、第一章の行論を成り立たせるために必須の論考である。すなわち、張方平執筆の蘇洵墓表は以前から偽作説があり、近年の宮崎市定氏の議論もあって今や定説となった感がある。但し実際は墓表そのものが論じられてきたことはなく、その墓表の中で初めて紹介された、蘇洵が王安石姦邪を予言したとされる弁姦論の偽作説が主題であった。弁姦論が偽作である以上、それを初めて世に出した墓表も、方平執筆への蘇軾による謝書も偽作であるという文脈である。しかし墓表について仔細に検討すると墓表偽作説は成立せず、墓表の記述は蘇洵、軾・轍父子の伝記資料として利用可能なことを論証した。「事実」とその叙述・伝達が絡み合う「歴史」を、いかに解きほぐすか、その一例を本章でも示した。

第三章「東坡の犯罪 - 『烏臺詩案』の基礎的考察 -」は、北宋文字の獄として著名な事件の、この時代としては稀な一次史料であると思われる『烏臺詩案』を検討する。御史台の取調べの一件書類を刊行したと推測されるこの書は、御史台の起案から神宗の裁決に至るまでの一連の経過が具体的に記される点で比類のない内容となっている。現行『烏臺詩案』は、その書誌的検討、御史弾劾文の罪名、律・勅の適用問題と最終決定の刑名との落差などに加え、旧法党人士に広く及んだ連座の範囲と政治的意味合いなど多様な考察を可能とする。文人官僚蘇東坡にとり公的・私的生活の決定的転機となったこの事件はいまだ検討すべき課題が多くある。続く第四章「東坡「黄州寒食詩巻」と宋代士大夫」は、烏臺詩案によって流された黄州での作品であり、かつ中国書史の最高峰に位置すると評される「黄州寒食詩巻」を中国文化史の観点から考察した。歴史研究の材料として中国書画を取り上げる場合は、往々書画本体同様、あるいはそれ以上に付けられた題跋が重要である。寒食詩は黄山谷庭堅跋の詩が加わったことでその価値が一層高まったのであるが、山谷がそれを認めた経緯、その後の詩巻の伝来、それらすべてが士大夫文化とは何かを物語る。

大正十三年に京都恭仁山荘で書き加えられた内藤湖南の題跋は、この詩巻の来歴を説く湖南の博識と、一昔前の日本人中国研究者が有した士大夫文化への理解の深さに圧倒される。日本で宋代中国史を研究する基本的問題がここに凝縮されているといって過言でないであろう。

第五章は「知杭州蘇軾の治績　―宋代文人官僚政策考」として上・下に分け、上では救荒策を、下ではその対高麗策を検討した。いずれも蘇軾の上奏文を分析の基礎材料として使用し、史料批判を行いながら当時の歴史状況の復原とそれに対応する杭州知事蘇軾の言動を検証した。上奏文という一人の官僚の提言ないし要求は、当然限られた視野・意図的な事実解釈などの制約を受けるが、その制約を前提に読み解くことで有効な歴史研究の史料足り得る。救荒策をめぐる現状認定と地方官同士の確執、中央での党争と政策判断、具体的な施策に士大夫官僚がどの程度かかわりあえるのかなど検討対象は多岐にわたった。一方、蘇軾の厳しい対高麗政策の背後にある福建海商集団の活動は、従来の文献史料では十分解明されなかった課題である。蘇軾の主張を分析することで明らかになった、宋人海商が高麗と連携しながら両国の外交政策にまで影響を及ぼしたことは、当時の東アジア海域世界研究にあって今後一層の論議が期待される分野である。

第六章「西園雅集考―宋代文人伝説の誕生―」は、五章同様上・下に分け、中国美術史上に著名な西園雅集の図と記を検討する。上は主に雅集が歴史事実か否かをめぐる従来の論争において、その動向が論点の一つであった記の作者である米芾の元祐年間初期の滞在場所を考証した。結論は通説と異なり、当時開封に行った可能性は大きいとなったが、それは直ちに雅集事実説を裏付けるものではない。むしろ弟子を含めた蘇軾の関係者一同が雅集を開催したという話が形成され、伝承される過程が大事であると主張した。下では、同様に画の構成を分析すると、西園雅集図と同様な雅集の伝承が既に北宋末に成立していた可能性を指摘し、徽宗朝の東坡弾圧が文献史料の記述通り一本調子の禁止であったとの理解は単純に過ぎる。中国史上の歴史評価の問題は、中国がその歴史を形成するプロセスそのものの問題であることを理解することが重要である。

終論では、とくに第一章の科挙改革をめぐる論議と改革の展開を再論し、以下の結論に至った。すなわち、現在の中国を理解する上で中国の歴史を知ることは不可欠の前提である。何故なら中国自身が、自らの歴史を絶えず祖述し反芻し、それらを自らの内に取り込みながら自己形成を遂げてきたからである。一方、このことは過去の中国史を理解するためにも、その祖述と反芻の蓄積過程を分析の俎上に上げなければならないことを示す。二十世紀前半の中国文明批評家の最高峰に位置する魯迅は、清末紹興の読書人周家の出身である。周一族は代々進士を輩出すると同時に、苛酷な科挙受験競争のなかで多くの人物が人格を歪め精神に異常をきたし、遂には進士である祖父と応試者である父による不正行為で処罰を受け家は没落する。魯迅が描く孔乙己と阿Qこそ中国史上の士と庶の成れの果ての姿であった。それらの直接のルーツを求めれば、結局、十一世紀に出現した新たな士‐

庶関係にたどり着く。魯迅の問題意識の根底には科挙社会があったのである。また毛沢東率いる中国革命において、なぜあれだけ執拗に反官僚主義が叫ばれ続けたのか、なぜ建国後も知識分子は冷遇され弾圧され続けたのか。これも庶の士（読書人）に対する長年の怨念をぬきにしては理解できないであろう。礼は庶に下らず、刑は士に上らずは、本来の意味を変えながらも士‐庶社会を端的に表現する用語として清末まで生きながらえた。この極限にまで洗練された礼と法を生み出した社会、重層性と画一・多様、秩序と渾沌が同居する中国の歴史を理解する一助とする、これが本書の最終目的であった。しかしそれを果たすためには、あらためてさらなる検討が必要であろうことを痛感する。